

日本語の音声指導事例紹介 - その2 -  
—中国語母語話者の指導から見えてきたもの—  
A Class Report #2  
Differences in Articulation in Speaking Japanese  
A Case Study of Mandarin Chinese Language Speakers

池田 英喜\*  
(iked@isc.niigata-u.ac.jp)

---

When native Japanese speakers say something in Japanese, they do not seem to stop any air stream even when they have to pronounce an explosive consonant. But when native Mandarin Chinese speakers speak Japanese, they make a clear stop when they pronounce an explosive consonant and that makes the consonant sound too strong to native Japanese speakers' ears. This is probably caused by the way they articulate when they speak.

---

## 1. はじめに

本稿では「中国語母語話者の日本語音声発話時の一番の問題は呼吸法である」この仮説を立てるに至った経緯を簡単に述べる。

新潟大学の全留学生の50%以上が中国語母語話者である。当然、日本語のクラスにも中国語母語話者が多く在籍し、日々日本語の実力向上に努めている。文法・語彙・作文等、読み書きという文字通り目に見える部分での伸びは顕著だが、ひとたび彼らが口を開き日本語を発すると、日本語母語話者との音の違いから、途端に彼らの評価が下がってしまう。従来どおり発音・アクセント・イントネーションについての改善を授業内では試みてきたが、私にはどれも中国語母語話者が日本語音を発する際の根本的な問題の解決にはつながっていないように思えた。この点について、本稿では報告する。

---

\*国際センター

<sup>1</sup>日本語音とは子音+母音の組み合わせで出来た、いわゆる拍のことである。日本語の拍は通常仮名1文字分の音に対応するため、日本語母語話者の感覚としては、仮名1文字=1日本語音という意識が強い。本稿では、1拍の音を1日本語音と呼ぶことにする。

<sup>2</sup>通常は子音+母音

## 2. 学習者の日本語の具体的な特徴

### 2.1. 中国語母語話者の出す音のイメージ

授業で学生を観察して気付いたのだが、初級レベルの中国人母語話者が日本語を話すときに特によく見られる特徴がある。それは、音を切って読んでいることである。

ここに仮に8つの日本語音<sup>1</sup>の連続があるとする。中国語母語話者がこれを発する際のリズムは、「タンタンタンタンタンタン」と8つの独立した音が並んで出てくるイメージに近い。ここでは以下のようなイメージ図で表すことにする。



個々の‘⇒’がそれぞれ1日本語音(=仮名1文字分の音<sup>2</sup>)に対応している。つまり、ひとつひとつの仮名の音をまったく独立して発音しているような感じで、‘⇒’と‘⇒’の間ひとつひとつに、非常に短くではあるが息継ぎのような間が入っている感じがするのである。

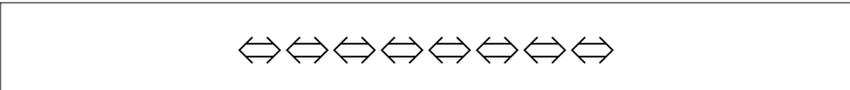
概して中国語母語話者は、仮名の子音部分が破裂音の場合には非常に明瞭に破裂音自体を発音する/しようとする傾向が見られる。このことは中国語の表記とも関係があると思われる。中国語では、漢字1文字1文字がそれぞれ意味を持ち、音を持っているので、正確な中国語発話には、1文字1文字しっかりと発音することが求められるのではないだろうか。だとすれば、中国語母語話者が、仮名を単体でしっかりと発音しようとする傾向が強いことにも頷ける。言い換えれば、中国語母語話者が日本語の破裂音を出す場合、いったん完全に声道を閉鎖してから再び開放して音を出すので、日本語母語話者が通常用いないような有気音となって出てくることが多いのではないだろうか。

### 2.2. 日本語母語話者の出す音のイメージ

一方日本語は仮名单体では意味を持たないので、意味のまとまり・区切りまでは少なくともひと続きの音として発音されなければならない。漢字でも2字・3字の熟語が多く、仮名同様に連続した音として出現しないとその意味をうまく伝えることができなくなってしまう。そのため閉鎖音であってもその閉鎖は非常にゆるいものとならざるを得ない。時には本来閉鎖音であるべきところが、実際には摩擦音になっているような場合もある。その結果、日本語母語話者の発する日本語音は、たとえ途中で破裂音を挟んでいても、あたかも母音を連続して出し続けているかのような音の連続として耳に響くことになるのではないだろうか。

先ほど同様に8つの音の連続があったとする。これを日本語母語話者が発した場合、それを全部一息に発音するような「タララララララ」というイメージで音が続いて出てくる。

先ほど同様にイメージを図示すると、以下のようなになる。



‘⇄’ひとつがやはり仮名1文字分の音、すなわち1日本語音に対応している。矢印が両側に出ているのは、前後の音との連続性を示している。結果として先ほどの中国語母語話者の場合とは異なり、聞き手には音が全て一息で出現し、つながっているかのような印象が持たれる。通常破裂音が出現するためには声道の閉鎖が起こるので、息の流れがいったん止まるはずである。しかし、息の流れを完全に止めてから破裂音を出すと、非常に強い音になり有気音化して出現することが多いことは先ほど述べた。このため日本語の破裂音は通常有気音としては出現せず、非常に優しく発音される。これは声道の閉鎖が非常に弱いものであることを示している。

### 2.3. 実際の発声の特徴

次にこれまでに述べたことを具体的な語を発音する場合を例に挙げて説明する。

「たとえば」という単語を発音するとしよう。

た	と	え	ば
破裂子音+母音	破裂子音+母音	母音	破裂子音+母音

個々の文字を正確に発すれば上記表下段のようになるが、実際の母語話者の発音は、下記表下段のようになる。すると、2つ目から4つ目までの日本語音は、[oea]という母音の連続のように聞こえる。

た	と	え	ば
領きのみで発声なし	破裂子音+母音	母音	弱い破裂子音+母音

学生には、「た」「と」「え」「ば」のという個々の発音に気をつけることを止めて、まず「た」の音では一拍分領くように首を振り、そのあとで「とえば」を続ければ、あたかも「たとえば」といっているように聞こえるという具合に指導した。

そのあとで、今度は「た」を最初につけて発音するように言うと、「たとえば」という音連続が、中国語母語話者でも非常にきれいに出ることが分かった。

同様に、「9月から」というフレーズでも試してみたが、結果は同じであった。

く	が	つ	か	ら
破裂子音+母音	破裂子音+母音	破裂子音+母音	破裂子音+母音	子音+母音

それぞれの日本語音を正確に発音すると、4つの破裂音が頭から登場する。実際日本語母語話者の発音する音は、以下のようなものに近い。

く	が	つ	か	ら
領きのみで発声なし	弱い破裂音+母音	破裂子音	破裂子音+母音	子音+母音

このように、息を吐き続けながら音を作ることが、日本語母語話者が発声する際の大きな特徴であり、中国語母語話者の発声の仕方との大きな違いである。そして、この点を克服しない限り、中国語母語話者は自然な日本語音の発声を身に付けることが出来ないということである。

### 3. 具体的指導方法

前節で見たように、息を吐き続けて音を作るための練習が必要なことがわかったので、演劇やアナウンサートレーニングでよくやる基礎練習を取り入れて、比較的短い時間（1回10分程度）の繰り返しで練習させてみた。

#### 3.1. Aパターン

音を切らずにインストラクターのあとについて五十音を1行ずつ読み上げる。その際、行の途中で息継ぎをせず、必ず一息で言わせる。

あえいうえおあお	はへひふへほはほ
かけきくけこかこ	まめみむめもまも
させしすせそさそ	やえいゆえよやよ
たてちつてとたと	られりるれろらろ
なねにぬねのなの	わゑゐうゑをわを

#### 3.2. Bパターン

1文字ずつ区切ってインストラクターのあとについて五十音を1行ずつ読み上げる。

あえいうえおあお	はへひふへほはほ
かけきくけこかこ	まめみむめもまも
させしすせそさそ	やえいゆえよやよ
たてちつてとたと	られりるれろらろ
なねにぬねのなの	わゑゐうゑをわを

#### 3.3. 結果

中国語母語話者の場合、意味のない音連続であれば、このような2種類の異なる連続音も出せるのだが、これが意味のある音になると、とたんにBパターンに近い発声方法しか取れなくなってしまうことが分かった。

この練習を週3回約1ヶ月続けた結果、初級レベルの学習者においては日本語音の改善が少し見られた。少なくとも、息を吐き続けることができないという問題は克服できたように思われる。また、区切って読んでも続けて読んでも日本語音としては1拍分の同じ長さを持つということが少し認識できたようで、これまでなかなか上手く長音が出なかった学生も、長音は1拍分音を伸ばすということがはっきり認識できるようになった。結果として、日本

語の拍感覚が少しよくなったように思われる。

#### 4. おわりに

本稿の報告は、あくまで教授者である池田本人の印象に過ぎないので、今後これを検証していく作業が必要になってくる。ただ、中国語母語話者が日本語音を発する際の問題は、口腔内での調音点や調音法といった、いわゆる音の作り方の問題よりも、母語による呼吸法の違いが大きな原因となっていることは、ほぼ間違いないと思われる。

(参考文献)

杉藤美代子 (1997) 『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂